



液圧加工技術の研究開発を行う株式会社山本水圧工業所

『SMILEαAD 財務管理』の連携で 業務効率と顧客サービスを向上 生産管理システム『TECHS-S』と



ハイドロフォーミング、CNCパイプベンダー、耐圧試験機などの製造装置を開発している

- 業種：製造業
- 事業内容：油・水圧応用機械装置および各種油・水圧機器の製造、販売
- 従業員数：66名
- サーバ：Windows 2000 Server、Terminal Server、MetaFrame Server、SQL Server

2004年12月取材

導入の狙い
業務の効率化と情報共有の強化

導入システム
『TECHS-S』、『MetaFrame』、『SMILEαAD 財務管理』、『EUC Tool』

導入効果
生産工程ごとの時間・原価管理を実現
月次会計の実現により
正確・迅速な経営判断が可能に
情報共有化と顧客サービスが向上

液圧加工装置の オンリーワンメーカー

株式会社山本水圧工業所は1930年(昭和5年)に創業した製造装置メーカーの老舗だ。水圧ポンプの製造からスタートし、1949年に油圧ポンプ技術を応用した「YS搾油機」の開発に成功した。この機械が「ステートフェア展」でブルーリボン賞(最優秀機械賞)を受

賞したことから農林・通産両省より「油糧機器重要工場」に指定され、「液圧加工の山水(やまずい)」といわれる今日の基盤を確立した。

その後も独自の液圧加工技術の研究開発に努力を傾け、ハイドロフォーミング(金属パイプの油圧加工装置)、CNCパイプベンダー、耐圧試験機などの製造装置を次々に開発、現在、これら三分野のトップメーカーとして産業の省

製造業の空洞化が懸念される中、独自の技術革新で「匠の国・日本」の伝統を守っているメーカーも多い。株式会社山本水圧工業所はそうしたメーカーのひとつだ。同社の製品の優秀性は国内はもとより海外でも高く評価されている。同社の独創性を支えているのは、やはり徹底した業務の効率化と顧客サービスのきめ細かさにある。同社は『TECHS-S』と『SMILEαAD 財務管理』の連携で、このバックボーンをさらにグレードアップしている。

力化、高品質化、安全性向上などに貢献している。

このため、同社の納入先は鉄鋼、機械、自動車を始めとする広範なハイテク関連産業および学術・研究機関に及ぶ。また海外約20カ国にも輸出しており、同社の技術力は国際的にも高く評価されている。

システム変更に伴う不安を デモシステムで解消

同社製品の大半は、1台ごとにスペックが異なる個別受注生産だ。作業を単純化しても、引合、見積、受注、設計、生産計画、資材調達、製品組立などの工程が必要になり、実際には、それぞれの工程においてさらに複雑な業務が発生する。同社はこうした複雑な業務を少しでも効率化するため、1984年頃に大塚商会の提案によりオフコンを導入し、業務管理の効率化を図ってきた。

このとき導入したオフコンベースの業務管理システムが拡張性に優れていたことから、その後の業容拡大にも対応をしていた。しかし、導入から15年も経つと、さすがにシステムの老朽化が否めず、システム更新の必要に迫られることとなった。

同社の社員は長い間オフコンベースの業務管理システムで仕事を続けてきているため、その業務フローに慣れ親しんでいる。そのため、新しいシステムを導入することにより、従来の業務フローから流れを変更すると、かえって効率が下がるのではないかと危惧された。そうした理由から、同社は当初オフコン上に構築していた業務管理システムを最新バージョンにすることを検討していた。そして、新しいパソコンにそのシ

ステムを移植する形での情報システム導入を計画した。そして、その計画に対し、大塚商会から統合型生産管理システムの導入の提案を受けたのだ。

同社の当初の計画通りにシステムを変更すると、これまで使ってきたオフコンベースの業務システムが独自システムになっているため、システム設計をゼロベースから作り直さなければならなかった。そうすると、導入経費がかかりすぎてしまう上に、導入後もバージョンアップやその他のメンテナンスに手間と時間がかかる、といった課題も残ってしまうのである。それに対して、パッケージ化された生産管理システムなら、独自システムに比べて導入経費が安く、導入期間も短く済むだけでなく、導入後のメンテナンスなども、比較的容易となるのである。

同社にとってこの提案は、魅力的なものだった。しかし、代表取締役 社長の山本 知弘氏は「生産管理の汎用的なシステムが、はたして当社の複雑な業務フローをカバーできるのかと、一抹の不安が残りました」と、当時を振り返る。そこで大塚商会から、まずはデモシステムを導入してその効果を測ってみてはどうか、という提案がされた。そして、実際に行ってみると、社員の間から「このシステムは、当社のコピーではないのか」との冗談が飛び出すほど、既存の業務フローがカバーされており、使い勝手もよく、違和感なく使用することができた。しかも、業務効率はそれまでのシステムより格段に優っていた。

既存PCを活かした システム更新を実現

こうして1999年、同社は機械装置製



「TECHS-S」と「SMILEα AD 財務管理」を連携し活用している

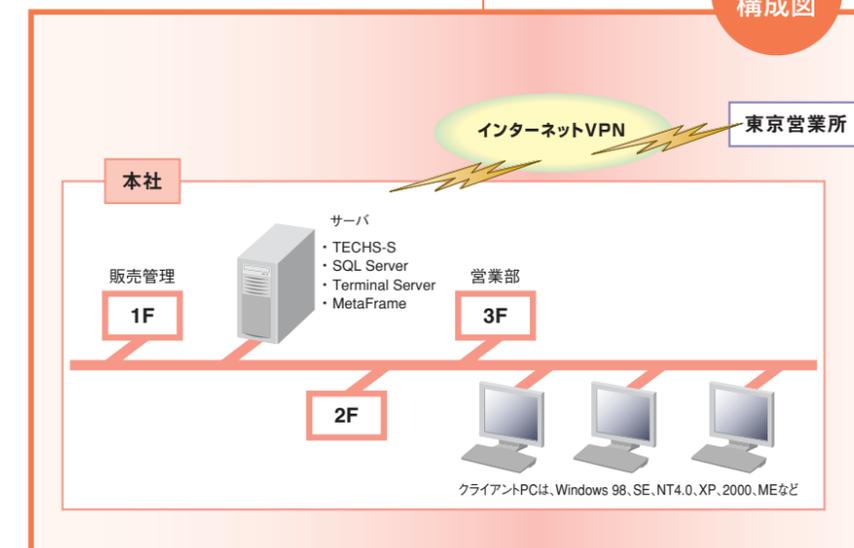
造業向け生産管理システム「TECHS-S」を本格的に導入したのだった。そして今回、業務処理のさらなる効率化と全社的な情報共有の緊密化を図るため、「TECHS-S」を最新バージョンに更新すると共に、「MetaFrame」、「EUC Tool (TECHS-Sオプションの帳票作成システム)」、「SMILEα AD 財務管理」などの導入を行った。

今回のシステムを導入する際に「MetaFrame」も導入したのは、社員がこれまでに使い慣れたPCをそのまま活かしつつ、システム更新への対応と全社的な情報共有緊密化を図るのが目的だった。同社の場合、Windows98、SE、ME、2000、NT、XPなどバージョンが異なるOSのPCが社員の間で使われている。当然、自分が使いやすいようにアレンジしたファイルや、さまざまなアプリケーションソフトがすでにインストールされているケースも多い。これを今回のシステム更新に伴って、同一バージョンのOSに統一したいところだが、それをしてしまうと、ファイルやアプリケーションのコンバージョンが必要になる。そうした手間だけでなく、投資コストがかかりすぎるなど、さまざまな問題も抱えることになる。それでは、各人

のデスクワークにも混乱が生じかねない。

そこで、この問題の解決策として、「MetaFrame」を導入することとなったのだ。「MetaFrame」ならば、サーバ側でアプリケーションを一元管理し、処理も行うことになる。そのため、クライアント側では特別なアプリケーションのインストールも、高いスペックも不要となる。つまり、新しくOSを導入する必要がないので、買い替えのコストを省くことができたのである。こうして使い慣

システム 構成図



代表取締役 社長
山本 知弘氏

「大塚商会さんとは20年来のお付き合いになりますが、提案力と顧客サービスにはいつも満足しています。業種こそ違え経営姿勢は当社と同じです。今後も当社のお客様のために、大塚商会さんのIT支援を期待しています」



常務取締役 管理部長
南平 榮一氏

「大塚商会さんの、SEの方々の迅速な行動力と高い技術力にはいつも感心しています。今後も当社に最適なシステム提案をしていただければと思っています」

れたOS上で、新たなシステムを導入し、基幹系業務は統一した処理法で行えるようになった。

さらに『TECHS-S』のオプション機能である、『EUC Tool』の有効活用により、生産データの分析精度が飛躍的に向上し、使い勝手も向上した。『EUC Tool』は、『TECHS-S』から必要なデータを検索、集計し、企業独自の帳票を作成できるデータベースツールで、このツールの利用により、設計から組み立てまで、生産工程ごとに所要時間と原価の管理ができるようになった。この結果、「今まで見えなかった業務のムダも見えるようになり、生産性がさらに向上し、期待通りの効率化が、混乱なく実現できました」と、常務取締役 管理部長の南平 榮一氏は語る。

また、『TECHS-S』と『SMILEαAD 財務管理』との連携処理ができるようになり、売掛・買掛金の月締めができるなど月次決算が可能になった。その結果、資金計画のブレも非常に小さくなったという。

山本氏は「結論的に言うと、月次決算の実現で、正確で迅速な経営判断ができるようになりました。また経営計画も早期に修正できるようになりました。こうした経営支援機能が当社にとって何よりのメリットです」と語る。

今回のシステム導入によって、既存のさまざまなOSのパソコンをそのまま有効活用し、そのうえ各生産工程の管理から財務にいたるまでの業務についても効率が向上している。それによって、顧客対応が迅速化し、顧客サービスもよりいっそう向上させている。営業部員についても、自分のPCからいつでも『TECHS-S』にアクセスできるので、装置製造の進捗状況や納期、在庫状況

など、顧客が知りたい情報をいち早く提供できるようになった。

今後は資材調達のIT化推進も視野に

同社は今後、さらなる業務効率化に向けて、生産スケジュールの緻密化、基幹業務と図面管理の連携、海外販売代理店などの情報システム連携、資材調達の合理化などにも取り組む姿勢である。

とくに資材調達の合理化に関しては、インターネットやEDI(Electronic Data Interchange:電子データ交換)を活用することで世界中から高品質・低価格な資材調達を実現することができる。これにより、無駄がなく、より品質の良い装置を作ることができ、そのうえ生産コストの削減もできる。こうしたことで、当社では国際競争力や研究開発の強化に努めたいとしている。

最後に山本氏は、大塚商会について「いつも当社の立場で考え、提案をしてくれる大塚商会さんの誠実さに信頼を寄せています。当社には、なくてはならないITパートナーだと思っています」と語り、今後のIT化推進にも大塚商会の誠実な支援を期待している。



サーバOSには『Windows 2000 Server』を利用している



株式会社山本水圧工業所のホームページ
<http://www.hyprex.co.jp/>